

## 脇本平也先生を偲んで

井上 順孝

今思うと、私はなぜあんなに何度も脇本先生の概論を繰り返し聴講したのだろうか、少し不思議な気がする。最初に先生の講義を聞いたのは、2年次後期の駒場での教養学部のものであった。まだ宗教学・宗教史学を学ぶと決めていたわけではなく、なんとなくとった講義であった。入学当初専攻しようと思っていた哲学が、自分の想像していたものとはずいぶん違って、やる気をなくしていた頃であった。高校時代に自分が思い描いていたのは、言ってみれば科学哲学のようなものであったのだが、たまたま受講した哲学関係の授業がハイデッガーの本をドイツ語で読んでいくというものだった。当てがはずれたわけで、面白くないと感じたのは当然であった。

そんな状況で受講していた一つが脇本先生の宗教学であった。先生の講義はとりわけ興味を惹くというわけではなかった。ただ、ほとんどさぼらず聞いた。なんとなく淡々とした味わいで、世界が少し広がり、宗教学を専攻するのもいいかなと漠然と思ったりした。

T君という同級生がいて、彼は宗教学を専攻しよう決めていたようだった。宗教学にいく人が少ないから一緒にいこうなどと誘われて、いつしか宗教学の研究室に出入りすることになった。T君は卒業後高校の教師になった。そういうわけで文学部に進学してからも、私は宗教学の概論をとることになった。ときあたかも大学紛争の真っ只中で授業が長

期にわたり中断した時期があったが、その前後に複数回脇本先生の概論を受講したのである。あるとき、「去年とほとんど同じですから、去年とった人はしばらく授業に出なくていいです」と言われた。自分のことと思っただけでしばらく授業には出なかった。先生はさぞかしやりにくかったんだろうと、今はその気持ちがよく分かる。

何回も受講した理由の一つは単位のとりやすさもあっただろう。だが、宗教学の先生は概して単位についてはやさしく、優以外をもらったことがない。今もこの伝統は継承されているに違いない。だから先生の概論を何度も受講したのは何か別の理由があったはずである。その語り口は気持ちがなごむものがあった。自分はこの分野で先端を行っているとか、自分はこの領域での専門家であるとか、自分の意見は重要なのだといった、そうした雰囲気はまるでなかった。こういう見方もありますというようなことを、淡々と述べられるのであった。人によっては物足りなかったと思う。しかし、教壇での悠々たる構えから、教師としての一つの姿が確かに焼きつけられた。

やがて、先生は分かったふりをしない人であるということに気が付いた。自分で十分消化できたもののみを学生に伝えるという姿勢であった。私も教壇に立つようになってから、

知ったふりをして教えたことがある。十分咀嚼していないままに、学説を紹介したりすることもあった。学説史を体系的に述べようとするならば、それはある程度致し方ないときもあるが、自制が必要である。自分はちゃんと知っているんだよと、学生たちに見栄を張ることから自由になるのは、意外と難しいものである。

大学院では水曜ゼミと呼ばれる教員全員が出席するゼミがあった。私が助手になったとき、助手もゼミに出席させてくださいと脇本先生にお願いした。私は博士課程の2年になったばかりの6月に助手に就任したので、突然水曜ゼミから離れるのは寂しいと感じたのが一因であった。これ以後助手が水曜ゼミに出るのは恒例になったようである。

ある日、その水曜ゼミが終わって二人で図書館の横を歩いていたとき、先生は「今日のN君の発表、あなたは理解できました？」と私にお聞きになった。「だいたいは分かりました。ちょっとよく分からないところもありましたけど。」と答えた。すると先生は「ぼくにはさっぱり分からなかった。」と言われた。あまりに正直な感想に少しびっくりした。でも、そのとき、先生は分からないことは分からないと正直に言われるんだということが、強く印象づけられた。

こうしたことと関連するに違いないのだが、日本宗教学会で先生が発表される内容は、すでに多くの人によって論じられていることを丁寧に整理して、その学説の意義を確認するというスタイルが多かった印象がある。最新の学説を追うというより、しっかりと地固めをして進むということを大切にされるのだなということが、だんだん分かってきた。定説とすべきことをしっかり見極めていくという姿勢に日頃から接していると、学生の側は新奇な説にすぐ飛びついてあれこれテーマを

渡り歩く態度は、自然と慎むようになる。講談社学術文庫に収められている先生の『宗教学入門』が宗教学の教科書として広く使用されているのは、そうした先生の姿勢が信頼感を醸し出しているからと思う。

おおらかな先生への甘えも多分にあって、私はときどき先生に対して不遜な物言いをした。1981年3月に東大を定年退職され、駒沢大学に移られることになったが、その退職のお祝いの席で、「これからはもう少し本を書いてください。」と述べた。これは一緒にゼミを受けていた人たちの似たような思いを代弁するつもりでもあった。

脇本先生も柳川先生も本はあまり刊行されなかった。しかし、講義や演習を通じて、われわれは先生方の深い学識と洞察力を実感していた。それらがなかなか刊行物にならないのは、とても残念な気がしていた。かたや集めた資料を片っ端から活字にただけではないかと思われる分厚い本を出す宗教学者が当時もいた。雑文と呼ぶべきものまでかき集めて一冊にして、博士論文の成果と銘うった本もあって、これなどはわれわれの間では嘲笑に近い評価になっていた。つまり、読むべき部分が少ない本が刊行される一方で、刊行されたらいいなと思う内容が本にならないことへの不公平感のようなものがあつたのかもしれない。資料を集めてそれを活字にしていくのも、それはそれなりに大変なことであると、後には分かったが、当時は読んでの面白さという点を、まずはチェックするという傾向がわれわれの間にあつたことは否めない。

駒沢大学に籍を移されてからほどなく、先生は1982年4月に『評伝清沢満之』、そして翌83年1月に『宗教を語る』を立て続けに刊行された。2冊が出版されてしばらくたった頃、ある会で先生と一緒にあった。著書のこ

とが話題になったとき、「いや、井上君にハッパをかけられたからね」とおっしゃられたので、少し恥ずかしい思いをした。自分の生意気が思い返されたからである。とはいえ、先生の考えておられたことを本にさせていただいたのは、弟子たちからすれば実に嬉しい限りであった。

私は助手時代、かなり自由に振舞ったらしい。らしいというのは、意識としては「改善できるものは改善したい」という以上のものではなかったのだが、それはときに学会や研究室の暗黙の了解を破るようなものだったらしい。にもかかわらず逆風を感じずに済んだのは、脇本先生の自由にやっていいですという、非常に懐の深い構えに大きく助けていただいたからであるのは間違いない。

日本宗教学会が旧態依然に感じられて、これを改革したいと私が言うと、やってみてくださいとのお墨付きを出していただいた。アンケートをとったりいろいろ試みても、どうも何も変わりそうもないですと申し上げると、まあゆっくりいきましょうという慰めをいただいた。この『東京大学宗教学年報』を発刊しようとしたときもそうであった。趣旨を申し上げると、「それはやってください。お金のことはOBの人たちに話しておきますよ」ということであった。いいアイデアであるなら、実現するはずだ。まだ青二才の私はそのように比較的軽く考えていた。『年報』自体はなんとか軌道に乗り、こうして今日まで続いているわけだが、発足時、脇本先生による先輩方へのひそかな根回しがなければどうなっていたか分からなかったのだと、あとになって気付いた。

そのように、常におおらかに見守っていた先生だが、すべて鷹揚というわけではなかった。助手になってほどないときの研究

室旅行で、オレンジ色のジーンズを履いて鎌倉の松ヶ岡文庫に行ったときは、さすがにこれはと思われたようだ。あとで、「あれはちよっとねえ」と言われたのを覚えている。学生気分を早く払拭せねばと猛省したものである。

先生がもう死を覚悟しておられたとき、病室にお見舞いにかがった。それは本当に死の直前の時期であった。残されたほんのわずかな日々を、何人かの弟子との短い会話に割くための手配をされたのであった。そのときに面会に行った人は皆、それぞれに先生の言葉を遺言として受け取ったと思う。

病室にはいると、先生は首を少しもちあげられた。苦しげに見えた呼吸の合間から、ゆっくりといくつかのことを先生はおっしゃった。だが、まず最初に私が1989年刊行の『年報別冊』に書いた師についてのエッセイのことを話題にされたので、私は一瞬「あっ」と心で思った。「師の不在」という不穏な感じのタイトルで書き、「師の不要」「師の不滅」として、続く号でそれぞれ書き加えたものである。いささかあやうい論旨と受け取られた部分もあったようで、先生たちも気にされたに違いない。あるいは気分を害された部分もあったかもしれない。そう思ったことがあったので、病室で脇本先生がまずその話題に触れられたとき、反射的に「やはり申し訳ないことをしたのかもしれない」という思いが頭をよぎった。

ところが先生がそれに次いでおっしゃったのは意外なことであった。私が師について書いたエッセイの内容を気にされていたのではなかった。自分が怠慢だったという意味のことを述べられ、詫言されたのである。私は身の置き所もなく、絶句してしまった。人格的に先生に及ぶべくもないことがあらためて身

にしみいり、だんだん先生のお顔がにじんで見えてしまった。

われわれの世代にとって、先生はちょうど父親のように感じられる年齢差であった。実際、父親のような眼差しで、われわれの生き方に目を注いでおられた。だが、ゆったりとした振る舞いのうちにも、確かな人間観察をされていたのである。そうした観察力は本を読むとか、研究会に出るとか、調査をすとかいった、研究上の営みによって得られるものとは、どうも性質が違うのではないかと思うようになっている。確かに、優れた研究者でも、人についての読み違いが多いような人をときどき目にする。

他人の心を読むというのは、人間がもっとも高次元にまで発達させた能力と言われている。多くの人の心が複雑な次元において読めると、かえって表面上のんびりせざるを得ないときも出てくるに違いない。脇本先生の淡々たる生き方は、いろんな人の心が読めた、あるいは少なくとも読もうという心構えがあったがゆえの、一つの選択肢であったに違いないと、私は思い至っているのである。